

原因帰属の自己奉仕バイアス

に及ぼす理由思考の効果^{1) 2)}

— よく考えることで自己奉仕バイアスは強まるか —

工 藤 恵理子

〔キーワード〕 自己奉仕バイアス、自己高揚、普遍的視座、文化心理学的視座

成功を内的要因に帰属し、失敗を外的要因に帰属するという原因帰属の自己奉仕バイアスには、大きく分けて2つの説明が存在する。1つは、動機的説明であり、もう1つは認知的説明である。この2つの説明は必ずしも相互背反的なものではないが、現状では動機的説明の方が優勢と思われる。本研究もまた動機による説明に基づき、自己奉仕バイアスに対する意志的理由思考 (effortful reasoning) の効果を検討するものである。意志的理由思考とは、必ずしも自発的ではなく、生起した事象の原因について考えること指し、本研究においては、具体的には、成功あるいは失敗経験の後にその原因について意識して思考する行為を指す。

人々の推論が動機に沿った形で歪曲することを示す例は数多くあり、動機づけられた推論 (motivated reasoning) と呼ばれ、Kunda (1990) のレビュー論文に詳しい。中でも、Pyszczynski and Greenberg (1987) は、人々は偏った仮説を持ち、情報を得る機会があれば、その偏った仮説を確証するような情報を探索することを示した。このような動機づけによって、仮説確証的な情報処理が生じるとする議論に沿って考えると、成功と失敗後の自己奉仕バイアスもまた、動機に基づく意志的理由思考によって強められると考えられる。つまり、成功と失敗の後に自己奉仕バイアスが示される場合、それが仮説として働き、さらに理由思考をした場合には、その仮説を確証するような証拠が探索さ

れ、その結果初期の仮説である自己奉仕バイアスが強められるだろうと考えられる。

また、Pyszczynski & Greenberg (1985) は、(非抑鬱的な人は) 成功の後では、自分の内面に注意を向け、失敗の後には自分ではない外部に注意を逸らそうとすることを示した。このように、人が通常(非抑鬱者であれば) 成功の後に自分の内に注意を向けるのであれば、自分の内にある内的な原因を発見しやすくなるであろうし、失敗の後に外部に注意を向けることで、その失敗に対して外的な原因を見つけやすくなると考えられる。そのため、そのような状態での理由思考をすることにより、自己奉仕バイアスは強められると考えられるだろう。

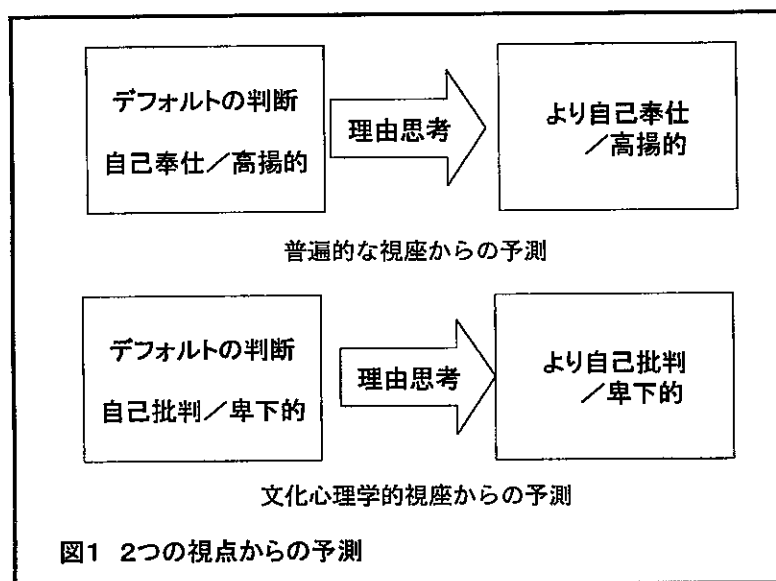
このように本研究は、成功、失敗の後の意志的理由思考が原因帰属の自己奉仕バイアスを強調する可能性を検討するものである。そこで、被験者に成功あるいは失敗のボーガス・フィードバックを与え、そのような結果を得た原因について考えるよう教示した場合と、そのような教示をしない場合の原因帰属を比較する。意志的理由思考は、初期のバイアスを強める方向で働くと考えられるので、成功あるいは失敗に対してその原因をよく考えるような教示によって、自己奉仕バイアスが強められるのであれば、成功や失敗のあとの原因帰属は、初期状態よりも自己奉仕的方向に偏っていると考えられるだろう。

さて、本研究は、人は成功、失敗のあとは自己高揚に動機づけられるという仮定に立っている。これは北米を中心とした社会心理学で前提とされる仮定であり、それを受け入れる普遍的な視座を本研究はとっている。しかし、その前提を疑問視あるいは否定する立場—文化心理学—も存在する。そこで、成功や失敗の原因帰属に関連した文化心理学の仮定を本研究に当てはめた場合について検討したい。ただし、ここで検討の対象とするのは、あくまで、成功や失敗の原因帰属に関連して提出されている文化心理学の仮定(のひとつ)であり、文化心理学全体(の理論や仮定)ではない。

文化心理学においては、相互協調的文化に属する日本人は自己高揚ではなく、自己批判を通じた自己改善に動機づけられているという議論がある(例えば北

山, 1998)。であるとすれば, 成功, 失敗経験の後にその理由を考える機会を与えられれば, 自己改善のために自己批判的な原因に目が向けられると考えられるだろう。また, 成功あるいは失敗経験の後に生じる原因帰属の反応は, 自己奉仕的になるのではなく, 自己批判的になると仮定されているので, 理由思考によってこの自己批判的傾向は強められると考えられるだろう。さらに言えば, たとえ, 最初の原因帰属の反応が自己奉仕的であったり, 自己奉仕的でも自己批判的でもないものであることがあったとしても, 理由思考によって, 自己奉仕バイアスは弱められるかあるいは逆転し, 自己批判的な帰属傾向がみられるという予測が立てられるだろう。

以上の対立する予測は図1のように示すことができる。よって, 本研究では, 理由思考の効果を検討することで, 日本人にあるとされる自己改善のための自己批判傾向という仮定の妥当性もあわせて検討する。



原因帰属の自己奉仕バイアスの研究は膨大にあり, そこで用いられている実験操作(成功・失敗の操作)と従属変数の種類(帰属尺度)も非常に多い。こ

のような中から、本研究では、Miller (1976) に用いられたフィードバックの方法（独立変数の操作）と帰属尺度（従属変数）の測定法に準じた方法を採用する。フィードバックの方法は、テストの成績に関するボーガス・フィードバックであり、成功群は上位20%、失敗群は下位20%にあたる成績とした。帰属尺度は、能力、努力、課題の難易度、運の4つの側面に対し、独立のリカート尺度で評定を求めるものであった。特に能力の測定方法に特徴があり、フィードバックの内容（成績）が実験場面で測定されるとされた能力をどの程度正確に反映しているかを問うというものであった。

方 法

実験は集団で実施された。

実験デザイン 結果（成功・失敗）×理由思考（あり・なし）の2×2。これら要因は被験者間で操作された。

被験者 心理学の授業を受講する女子短大生58名。実験参加によって、成績の加点を得た。

手続き 実験室に到着後、被験者は箱から番号のくじを引き、番号に該当する座席に着席するよう教示された。この番号は、複数使用される質問紙をマッチングさせるために使用された。匿名性を保証するために被験者は個人が特定できる一切の情報をいかなる質問紙の回答の際にも求められなかった。そして、匿名性が完全に保証されていることを被験者に対して十分に説明した。

被験者は、実験の目的は、認知的複雑性とパーソナリティの関係を調べるものと説明され、そのため、認知的複雑性とパーソナリティ検査を受けてもらうことになることと教示された。そして、まず最初に自尊心尺度、自己評価式抑鬱尺度、ベック抑鬱尺度に回答した（それらの尺度は今回の分析には含めていな

い)。その後、被験者は認知的複雑性に関する簡単な説明を受けた。その説明の中で、認知的複雑性能力が現代社会において非常に有益な能力であることが強調された。また、認知的複雑性検査終了後、被験者自ら成績を採点し、その評価を見て、それについていくつかの質問に答えることになるという説明された。

成功、失敗の操作は、認知的複雑性検査の冊子を用いて行われた。成功用の冊子と失敗用の冊子は被験者に対してランダムに配布され、被験者には複数の種類の冊子が配布されていることはわからないようになっていた。この検査用の冊子は、認知的複雑性検査の例題、問題5問、基準点、評価、感想の頁からなっていた。理由思考あり群の冊子には、評価と感想の間に理由思考のための頁が挿入されていた。

まず、最初に例題を使って解答方法の説明がなされ、被験者が間違いなく解答方法を理解したことを確認した。問題は、5種類の図形に恣意的に与えられた番号を、5種類の図形がランダムにならんだ用紙の図形の中に、制限時間内にできるだけ多く記入するというものであった。

検査終了後、実験者は正答を読み上げ、それに従い被験者は自己採点をした。可能な得点範囲は各問に対し0点～90点であった。その後被験者は、自分の得点が基準点を超えているかどうかチェックをした。基準点は冊子の中に記載されており、成功条件では、(38, 42, 40, 35, 41)となっており、失敗条件では(77, 70, 72, 65, 73)となっていた。これらの得点は同一課題を用いた別の実験において、90%以上の被験者の得点範囲の上限と下限を元に決定され、成功条件での基準点は、ほとんどの人がそれ以上の得点となるように設定され、失敗条件での基準点は、ほとんどの人がそれ以下の得点となるように設定されていた。冊子には、5問中3問以上基準点を超えていた場合が合格であり、それ以下の場合不合格となることが明記され、被験者は自分が合格であるか不合格であることを確認した。冊子の次の頁には、合格した者、合格できなかった者に対する評価が書かれていた。被験者全員が合格、不合格を確認した後、一斉に次頁にある評価の頁に進み、その内容をよく読むように教示した。成功条

件と失敗条件の評価はそれぞれ以下のものであった。

成功条件： 先ほどの採点の基準は、女子大学生（短大生含む）の上位20%に入るかどうか調べるものでした。よって、5問中3問以上合格した方は確実に上位20%以内に入る成績であり、その認知的複雑性は、女子大学生の標準と比べて非常に高いと言えます。この能力が高いことは、複数の異なった情報を一度に処理することができることを意味し、高度情報社会といわれる現代の社会においては、非常に重要な能力を有していると言えます。

合格が5問中3問以下の成績だった方は残念ながら、認知的複雑性能力は高いとは言えません。

失敗条件： 先ほどの採点の基準は、女子大学生（短大生含む）の下位20%に入るかどうか調べるものでした。よって、5問中3問以上合格できなかった方の成績は確実に下位20%以下の成績であり、その認知的複雑性は、女子大学生の標準と比べて非常に低いと言えます。この能力が低いことは、複数の異なった情報を一度に処理することが非常に不得意であることを意味し、高度情報社会といわれる現代の社会においては、非常に重要な能力を欠いていることになります。

5問中3問以上合格できた方の認知的複雑性は低いということはないと言えます。

評価を読んだ後、理由思考有り群では、得られた結果に対して「なぜそうなったのか」について理由を考えるよう教示された。具体的な教示は以下のものであった。

あなたの成績がよかった（または悪かった）のはどうしてだと思いますか。これから3分間の間、よく考えてみて下さい。その間考えついた理由を簡条書きの形で、できるだけたくさん下の空欄に記入して下さい。途中で考えるのを

やめたりせずに3分間の間、ずっと考え続けて下さい。

実験者により3分間時間が測定され、理由思考が実施された。

理由思考有り群では、理由思考の後、理由思考なし群では、成績に対する評価を読んだ後、操作チェック（成績がどの程度良かったか）を含む従属尺度に回答した。主要な従属尺度は成績に対する原因帰属を問うもので、能力、努力、課題、運の4項目からなっていた。能力については、Miller (1976) に倣い、当該の能力に特定の尋ね方をした。具体的には、「あなたの成績はあなたの認知的複雑性をどのくらい正確に反映したものだと思いますか」というものであった。

全ての問に回答が終了した後、質問紙を回収し、疑念のチェックをした後、デブリーフィングを行い実験を終了した。デブリーフィングに際しては、認知的複雑性能力検査のボーガス・フィードバックに関して、被験者に影響が生じないように十分に配慮した。実験に要した時間は約60分間であった。

結 果

成功条件の被験者のうち2名の得点が合格点に達しなかったため、分析から除外した。

操作チェック 成績がどの程度良かったか（7件法）という問に対する回答の平均は成功条件の方が失敗条件よりも有意に高く（ $M=5.73$ vs $M=1.45$ ），操作は成功していた（ $F(1,52)=234.21, p<.0001$ ）。

原因帰属

個別指標による分析 4つの原因帰属尺度に対して個別の2（結果：成功・失敗）×2（理由思考：あり・なし）の分散分析（ANOVA）を行った（図2）。

能力 有意な主効果はなく、交互作用効果が有意に近かった（ $F(1,52)$

=3.29, $p<.075$)。この交互作用効果を細かく検討するために、理由思考あり群、無し群ごとに成功条件と失敗条件の違いを検定した。その結果、理由思考なし条件では、成功、失敗条件による違いはみられなかったが ($F(1,26)=0.32$, ns; $M=4.00$ vs $M=4.33$)、理由思考あり群では、成功条件の方が失敗条件よりも認知的複雑性検査の成績は認知的複雑性能力を正確に反映していると回答する傾向にあった ($F(1,26)=3.91$, $p<.06$; $M=4.57$ vs $M=3.36$)。これは、いわゆる自己奉仕の帰属のパターンを示すものであった。

努力 結果の主効果のみが有意に近かった ($F(1,52)=2.93$, $p<.093$)。これは、成功条件の被験者の方が失敗条件に比べて回答に際して一生懸命であったとしていた ($M=6.37$ vs $M=5.97$) ことを意味する。

課題 結果の主効果と理由思考の主効果が有意であった ($F(1,52)=10.82$, $p<.005$; $F(1,52)=4.27$, $p<.05$)。失敗条件に比べて成功条件の被験者の方が認知的複雑性検査が難しかったと回答していた ($M=4.79$ vs $M=4.44$)。Miller (1976) ではこのパターンが自己奉仕バイアスと解釈されている。また、理由

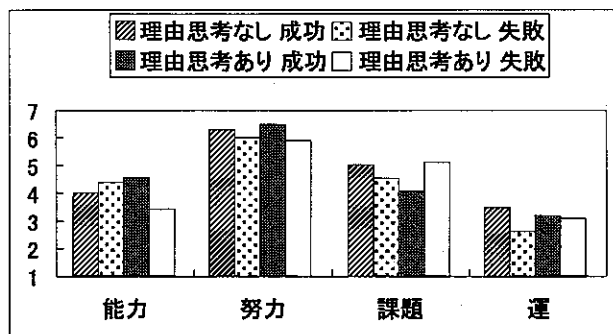


図2 条件ごとの個別の帰属尺度の平均値

能力: 得点が高いほど認知的複雑性能力を正確に反映している

努力: 得点が高いほど一生懸命に回答した

課題: 得点が高いほど難しい

運: 得点が高いほど運が関係している

思考あり条件の方が理由思考無し条件に比べて認知的複雑性検査が難しかったと回答していた ($M=4.75$ vs $M=4.50$)。

運 いずれの主効果、交互作用効果も有意に至らなかった。運に対する帰属に対しては結果も理由思考も影響しなかった。

総合指標による分析 自己奉仕的バイアスとは、成功を内的要因に帰属し、失敗を外的要因に帰属することを指すが、言い換えればこれは、成功に対しては、外的要因に比べて内的要因に原因帰属をし、失敗に対しては内的要因に比べて外的要因に原因帰属をすることになる。このように外的帰属と内的帰属の相対的優位性を検討するためには、上述のように個々の帰属尺度を別々に分析するのではなく、帰属の4つの尺度を繰り返し要因とした多変量分散分析(MANOVA)を行う必要がある。そしてそのためには帰属の尺度の得点方向を揃える必要がある。具体的には、失敗条件の被験者の努力帰属の評定を逆転させ、成功条件の被験者の課題帰属の評定を逆転させた³⁾。これで、帰属得点はすべて、得点が高いほど結果を自分に帰属していることを表すことになる。さらに、能力帰属と努力帰属に対する評定を合計し、内的帰属の指標とし、課題帰属と運帰属に対する評定を合計し、外的帰属の指標とした。

上記の2つの指標に対し、2 (結果: 成功・失敗) $\times$ 2 (理由思考: あり・なし) $\times$ 2 (原因の所在: 内・外) のMANOVAを行った。最後の要因のみが被験者内要因であった。結果 $\times$ 原因の所在と結果 $\times$ 理由思考 $\times$ 原因の所在の交互作用効果が有意であった ($F(1,52)=35.56, p<.0001$; $F(1,52)=7.26, p<.01$)。前者の交互作用効果は後者に制限されるので、ここでは後者の交互作用効果を検討する。そのために、理由思考のあり群と無し群ごとにMANOVAを行った。双方において結果 $\times$ 原因の所在の交互作用効果が有意であった ($F(1,26)=5.09, p<.05$; $F(1,26)=42.63, p<.0001$)。図3に示したとおり、自己奉仕的帰属のパターンが双方に認められたが、特に理由思考あり条件でより顕著であった。予測通り、成功、失敗後の理由思考は、自己奉仕バイアスを強めていた。

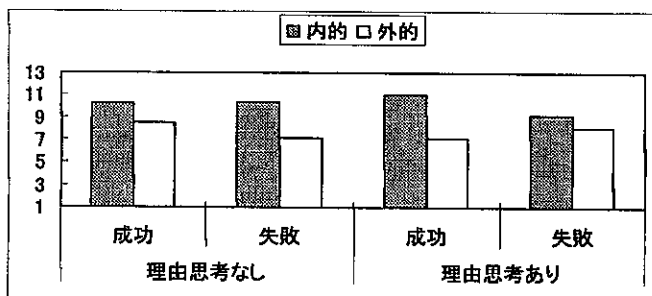


図3 条件ごとの総合的帰属指標の平均値
得点が高いほどその要因に帰属していることを示す。

その他の尺度 認知的複雑性能力の個人的重要性、一般的重要性、検査の楽しさ、認知的複雑性能力の有益性の評定に対して、 2×2 のANOVAを行った(図4)。認知的複雑性能力の個人的重要性および一般的重要性の評定において、理由思考の主効果が有意であった($F(1,52)=5.24, p<.05$; $F(1,52)=4.26, p<.05$)。理由思考あり条件において理由思考無し条件に比べて、認知的複雑性能力が個人的にも一般的にも重要であると評定していた($M=4.90$ vs $M=4.07$; $M=6.39$ vs $M=4.67$)。この結果は予測していなかったものであり、その原因を特定するためにはさらなる検討が必要である。検査の楽しさ、認知的複雑性能力の有益性に関しては、有意な主効果も交互作用効果も認められなかった。

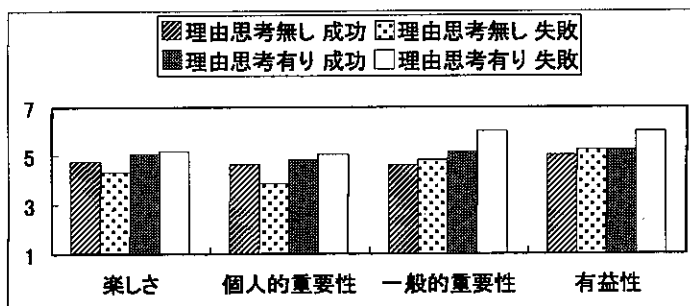


図4 その他の補足的尺度の条件ごとの平均値

楽しさ: 得点が高いほど検査が楽しかった

個人的／一般的重要性: 得点が高いほど認知的複雑性能力は重要

有益性: 得点が高いほど認知的複雑性能力は有益

考 察

個々の帰属尺度に対する分析では、能力帰属においてのみ、仮説を支持する方向の結果が得られ、理由思考によって、自己奉仕バイアスが強められる傾向が見られた。努力帰属、課題帰属では、自己奉仕バイアスがみられたが、その程度は理由思考に影響されていなかった。運帰属についてはいずれの効果も有意ではなかった。全体として、個々の帰属尺度の分析では、被験者の帰属パターンは自己奉仕的傾向にあったが、予測していた理由思考の効果は能力帰属においてしかみられなかったことになる。しかし、理由思考によって自己奉仕バイアスが弱められるあるいは修正される（自己批判的方向へ変容する）という兆しはまったく認められなかった。

総合的指標の分析は、仮説を支持するものであった。成功の原因を自らの責任に帰属する（失敗よりも成功において、内的帰属をする）、あるいは、失敗

の原因を自らの責任が小さくなるように帰属する（成功よりも失敗において外的帰属をする）傾向としての自己奉仕的帰属パターンが認められ、その傾向は理由思考によって強められていた。

以上の結果は、日本人は成功や失敗の後に自己高揚的になるのではなく、自己批判的であるという文化心理学の主張（例えば 北山, 1988）と不整合である。しかし、これまでの日本での自己奉仕バイアスに関する先行研究において、明確な自己奉仕的帰属が見いだされない場合が多かったこともまた事実である。自己批判に動機づけられた日本人という仮定は、そのような先行研究の結果をうまく説明するものである。また、日本における自己奉仕バイアスに関する先行研究において殆ど自己奉仕バイアスの傾向が認められなかったにもかかわらず、本研究で自己奉仕バイアスが認められたのはなぜか、その理由を特定することは困難である。だが、本研究がある条件の下では日本人被験者も自己奉仕バイアスを示すことを呈示したこと、特に、Kitayama & Karasawa (1997)の主張のように潜在的指標だけではなく、顕在的指標において自己奉仕バイアスが生じることを示したことには意味があるだろう。

もし、日本人が特に自己改善のために自己批判に傾倒しているのであれば、成功や失敗の後の理由思考は自己奉仕的ではなく、自己批判的な帰属傾向を生み出すと考えられる。本研究は日本人の自己批判傾向の存在を否定するものではないが、ある条件においては、日本人被験者が自己高揚に動機づけられていたことを示している。特に、本研究で被験者がおかれていた状況は、北米などで実施されている自己奉仕バイアスの研究の実験状況と類似のものであり、特殊なものであった訳ではない。よって、本研究は日本人にも相互独立的な文化に属する人々と同様の自己高揚動機が存在すること、そして、多くの日本で行われてきた自己奉仕バイアスの研究においては被験者に自己批判的反応を生じさせるような要因が、実験者の意図しないところで侵入していた可能性を示唆するものであろう。そして、この点を検討することで、これまで見過ごされてきた、自己奉仕バイアスあるいは自己批判バイアスの生起に関わる要因が浮かび上がってくる可能性もあると考えられる。殊に、顕在的指標を用いた場合の

日本人被験者における自己奉仕バイアスの生起条件については、過去の内外の研究の詳細なレビューを通じて、境界条件を見いだすことが求められる。そして、その境界条件を設定した実験によって、生起条件を明らかにすることが望まれる。

註

- 1) 本研究は科学研究費奨励研究(A) (平成9・10年度 課題番号09710112 研究代表者: 村田(工藤)恵理子)の補助を受けて行われた。
- 2) 本研究は1999年8月アジア社会心理学会第3回大会(台北)で発表された。
- 3) 厳密にはこのような尺度の逆転は好ましくないと考えられるだろう。

謝 辞

本研究の実験の実施に際し田代友美さんと佐藤朋子さん(青山学院女子短期大学教養学科1998年度卒業生)にお手伝いいただきました。記して感謝申し上げます。

また本研究の計画および本論のまとめに際し沼崎誠先生(東京都立大学)に貴重なご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

引用文献

- 北山 忍(1998) 自己と感情 共立出版
- Kitayama, S., & Karasawa, M. (1997) Implicit self-esteem in Japan: Name letters and birthday numbers. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 736-742.
- Kunda, Z. (1990) The case for motivated reasoning. *Psychological Bulletin*, 108, 480-498.
- Miller, D. T. (1976) Ego-involvement and attributions for success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 901-906.
- Pyszczynski, T., & Greenberg, J. (1985) Depression and preference for self-focusing stimuli following success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1066-1075.
- Pyszczynski, T., & Greenberg, J. (1987) Toward an integration of cognitive and motivational perspective on social inference: A biased hypothesis-testing model. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 20, San Diego, CA: Academic Press. Pp. 297-340.

